

令和7年度 小金井市立小金井第四小学校 授業改善推進プラン

1 授業改善の方針

【国語・算数・理科共通】

「自ら学ぶ力」「自分で考える力」「自分で選択する力」「自分で決める力」を高める授業づくりを推進する。

2 児童の現状分析

(1) 学習状況調査

国語	<p>○ 「話すこと・聞くこと」について、都平均よりも正答率4.3pt 下回っており、苦手さが見られる。特に正答率が下回っている問題として、自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができるかどうかをみる問題では9.4pt と都平均より大きく下回った。</p> <p>○ 「書くこと」について、都平均よりも1.6pt 上回っているが、項目によってばらつきがみられる。文章の構成を考える問題（書く内容を明確にしたり、段落相互の関係に注意したりする）については2.7pt 下回っているが、図表などを用いて書き表し方を工夫したり、自分の考えを上手に伝える方法を考えたりする問題については、5.7pt 上回った。目的や意図に応じて詳しく書いたり、自分の考えを上手に伝える方法を工夫したりする問題については、1.6pt 上回った。この問題については、無解答の割合（四小：2.2pt）が都平均（5.9pt）の半分程度であった。</p> <p>⇒ 図表などを用いて様々な方法で書き表したり、軽重を付けて書いたりすることは得意な反面、段落構成や文章の中心になることを明確にするなどの文章の構成力という点は課題がある。</p> <p>以上から、文章の構成力について、段落メモの活用や接続詞の指導、モデル文提示などを取り入れた授業改善を行っていく。</p> <p>○ 「読むこと」について、都平均よりも0.6pt 下回った。特に下回っている問題として、文章全体の構成を捉えて要旨を把握する問題は、3.5pt 下回った。</p> <p>⇒ 文章全体の構成を捉えたり意識したりする力に課題がある。</p> <p>以上から、文章全体の構成を捉える力について、全文シートの活用や段落ごとの要約の指導、文章構造の見える化などを取り入れた授業改善を行っていく。</p>
算数	<p>○ 都平均を上回ったのは、「数と計算（2.7pt ↑）」「変化と関係（2.1pt ↑）」「変化と関係（3.6pt ↑）」</p> <p>⇒ 「数と計算」の小数、分数の加法について、共通の単位を見いだす問題は、前者が6pt ↑、後者が3.3pt ↑と正答率が高い。表し方が変わっても数の相対的な大きさを捉える力がある。（問題は2つの数値間での方法の検討であった。）</p> <p>⇒ 「データの活用」において、2つの数量関係に着目する問題は正答率が高く、特に生活に根ざした2つの問題（ハンドソープのプッシュ数）は、5.4pt ↑、6pt ↑と都平均を上回った。比べる数が2つであることや、生活に根ざした問題についての理解力が高い。また、数を相互比較して考える問題は得意である。</p> <p>○ 問題形式は、「記述式」が都平均より3pt 上回った。全ての記述式問題で都平均を上回った。</p> <p>○ 無回答の割合は全ての問題で東京都平均を下回った。</p> <p>⇒ 計算の仕組みや自分なりの問題の解法についての記述が得意かつ意欲的である。</p>

理科	<ul style="list-style-type: none"> ○ 都平均を上回った項目は、領域として「粒子（金属、水の状態変化など 2.3pt ↑）」「生命（ヘチマの発芽条件、顕微鏡 2.8pt ↑）」であった。その他の領域も上回った。評価の観点として、「思考・判断・表現（3.1pt ↑）」があった。問題形式として「短答式 8.2pt ↑」17 問中 4 問であった。 ○ 都平均を下回った項目は、問題形式の「記述式 4.8pt ↓」であった。数値として、無回答の割合が、記述式 1 問目、四小：5.5（東京都平均：10.1）記述式 2 問目、四小：6.6（東京都平均：14.0） ⇒ 理科について、扱う単元によって児童の理解にばらつきが見られる。全体的に短答式の問題の方が正解率が高い。記述式の問題は正答率が低い、無回答の割合が低く、書こうとしているものの的確に正解の内容を書くことは苦手、という姿がみられる。 ○ 正答率が低かった問題に共通しているのは、評価の観点が「思考・判断・表現」で問題形式が「記述式」であることから、児童は事象や結果に対して論理的に結論を導くための力を養う必要があることが分る。「どうしてそのような結論に至ったのか。」という思考過程を全体でよく共有し、結論に対して合意形成を行っていく活動を授業改善に取り入れていく。
----	---

（２）児童質問紙調査

- 「自分には良いところがある」…本校 91.2% 都平均 86.3%（都平均より 4.9 ポイント↑）、「将来の夢がある」…本校 83.5% 都平均 81.6%（都平均より 1.9 ポイント↑）であり、本校の児童は、自己を前向きに捉える意識が高いことが分かる。更に、「算数の勉強は得意ですか」…本校 69.3% 都平均 66.2%（都平均より 3.1 ポイント↑）という結果から、自分の得意な教科を自覚している児童が多い。このことから、自己の長所や得意なことをしっかり認識し、自分の将来に希望をもっているなど、総じて自己肯定感が高い傾向があると考えられる。
- 「学校に行くのは楽しい」…本校 75.9% 都平均 86.1%（10.2 ポイント↓）、「先生はあなたの良いところを認めてくれている」…本校 86.8% 都平均 91.8%（5 ポイント↓）という結果から、一部の児童において、教員との関わりや自己の肯定的側面が十分に認められず、学校生活における満足度も低下している可能性があると考えられる。児童の自己肯定感の維持や向上のためには、教員からの承認的な関わりが重要であることを踏まえると、今後の取り組みの改善が求められる。
- ⇒ 改善策として、日常の授業や生活指導の中で、児童一人ひとりの良さや成長に焦点を当てた具体的な声掛けを意識的に行うことや、児童の行動や努力の過程を積極的に認める姿勢を教員間で共有し、教員全体で承認的な文化をつくっていくなどの取り組みを行う。更に、学級通信や個人面談を通じて、児童の良さを保護者とも共有することで、児童自身が様々な場面で認められていると実感できるようにしていく。
- 「休日に 2 時間以上家庭学習を行う」…本校 13.2% 都平均 25.3%（12.1 ポイント↓）という結果から、本校の児童の課題として、家庭学習の習慣や、自分で学ぶ力が充分でない可能性がある。学校でも学習の定着を重視した指導法の改善とともに、普段の授業から「学び方」や自ら学びへ取り組むための「自己調整力」を高める指導を推進していく。
- ICT機器の使用に関して、「文章作成ができる」…本校 91.2% 都平均 84.7%（6.5 ポイント↑）、「インターネットを使って情報収集できる」…本校 94.5% 都平均 90.8%（3.7 ポイント↑）、「情報を整理できる」…本校 88% 都平均 73.8%（14.2 ポイント↑）、「プレゼンテーションを作成できる」…本校 87.9% 都平均 82.7%（5.2 ポイント高）と、全ての項目において都平均を大きく上回っている。今後も ICT機器を効果的に学習に取り入れた授業づくりを継続して推進していく。